みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

黒河流域における「生態移民」の始まり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4624

第1章●黒河流域における「生態移民」の始まり

――内モンゴル自治区アラシャ盟エゼネ旗における事例から

――小長谷有紀

はじめに

私が初めて黒河流域を訪れたのは二〇〇〇年八月のことであった。科学研究費補助金を得て「モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴史民族学的研究」をおこなうために、青海地方を回ったのち、酒泉から北上して内モンゴル（蒙古）自治区アラシャ（阿拉善）盟エゼネ（額済納）旗に到着した。このとき、私たちの調査にはアネット・エルラーが同行していた。彼女はデンマーク王立コペンハーゲン博物館のドイツ人研究者で、モンゴル民族音楽を専門としている。彼女にとってエゼネは特別の場所であった。なぜなら、

写真 1-1　話を聞いたエゼネの老女
(注)2000 年8月、小長谷有紀撮影。

彼女の勤務する博物館には二〇世紀初頭に収集されたモンゴル民族の楽器や録音メディアが多数保存されており、なかでもここエゼネ旗からの収集は充実していたからである。それらを収集した人の名は、ヘニング・ハズルンド。内陸アジアを探検した有名なスウェン・ヘディンの調査隊のうち、一九二七年から三〇年まで随行した人である。収集資料の整理と分析を担当する彼女にとって、現在なおこの地において伝承されている民謡を収録することは旅の重要な目的であった。

地元の教育委員会などから紹介してもらい、民謡がうまいと評判の老女を一緒に訪ねてゆき、自慢ののどを披露してもらう。その前に、まずは話を聞こう（写真1-1）。

「昔はポプラがたくさんあった。カッコウが鳴

いていた。カッコウの声が多いと雨になる。川の周辺には葦が生えていて、ラクダが見えないくらいの草丈だった。今、土地はあるが草地はない。コケのように薄い草しかない。昔はたくさんの植物があった。今はもうポプラとタマリスクとアカザしかない」

太陽は照りつけ、雨はほとんど降らず、砂だらけの土地である。しかし、彼女たちは、ここがカッコウの棲む森だったと語る。スウェン・ヘディンもまたその旅行記『ゴビ砂漠横断』において「この世の天国」と記している。この地にいったい何が起こったのだろうか。砂漠のなかのオアシスは、たった半世紀のあいだに、どうしてこれほど砂漠化してしまったのだろうか。

この地が二〇世紀になって経験した、水資源の変動を解明することは、人間の過去の歩みを正しくとらえ、適切な未来を構想するうえで重要な手がかりをあたえてくれるにちがいない。そのような確信をもって二〇〇一年度から新しい研究が始まった。総合地球環境学研究所が実施するプロジェクト研究のうちのひとつ「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷」（通称「オアシスプロジェクト」）である。二〇〇二年度から本格的な調査がおこなわれることとなった。

本稿は、その「オアシスプロジェクト」の一環として二〇〇二年六月に秋山知宏さんとともに調査した際のフィールドノートをもとにしている。秋山さんは乾燥地域における地下水を専門とする若手の水文学研究者であり、地下水位を測定するために、私たちは各家庭の利用する井戸を訪ね歩くことにした。井戸

の水位を測るというのは簡単なようでいて実はそうでもない。なぜなら、多くはポンプ式井戸に技術転換されているため手動で汲むという開放式の井戸がもはや少なくなっていたからである。どこにそのような昔の井戸が残っているか、どの家ならまだそんな古い井戸を使い続けているか、人に聞かないかぎり、まったくわからない。井戸に測りを垂らすという単純な測定作業を遂行するために、現地に生きる人びとを師とあおぐ調査がこうして始まった。そして、彼らの声に耳を傾ければ、彼らの憂いは自然と浮かびあがってくる。

当時、「生態移民」という政策がいよいよ実施される直前期にあたり、人びとは集うたびに、漠然とした将来への不安を感じていた。誰がどこに移るのか、移されるのか、移って暮らしは成り立つのか、と。本稿には、あの頃の悩ましさを映しとどめておきたいと思う。いわば黒河下流域における「生態移民」前夜の様子を伝えることになるだろう。

二〇〇二年以降、「生態移民」として総称される政策が本格的に実施されるようになると、人びとの憂いは現実のものとなる。もちろん、なかには憂いを克服して成功をおさめた事例もある。そして、内モンゴル自治区での事例は概して先行事例として模範とされ、全国的に拡大展開されるようになっている。その意味で、エゼネ旗で目撃された「前夜」という過去の実態は、これからの各地での未来でもありうる。問題を事前に把握し、より妥当な実施をめざすうえで、このような「前夜」は貴重な証言となりうるのではないだろうか。

黒河の流れ——その二千年

黒河は、中国西北部を東西に走る祁連（チレン）山脈の氷河域に水源を発し、張掖、酒泉などのオアシス都市をうるおし、さらに北上してモンゴル国境付近の砂漠にある湖をつくってきた河川である。その流路は全長約四〇〇キロメートル、流域面積は一四万平方キロメートルにおよぶ（図1-1）。タリム河に次いで、中国第二の内陸河川である。

黒河の終点にあった湖は歴史文献で「居延沢（きょえんたく）」あるいは「居延海（きょえんかい）」として知られてきた。漢代にはすでに屯田兵による開拓がおこなわれ、木簡に書かれた文書が数多く出土して「居延漢簡（きょえんかんかん）」として知られている。中国のいわゆる中原地域からいかにも辺境と思われる、このような遠隔地域において、こうした歴史的な記録が充実しているのは、この地域が古くから、農耕民の開拓地であり、遊牧民の侵入路であったことを反映している。すなわち、統治者にとってきわめて重要な戦略的拠点であったからである。

この古代の開発地域は、黒河の下流域に相当しており、その河川はかつて「弱水」と呼ばれていた。おそらく、人間が制御して利用しやすい河川だったのであろう。灌漑施設が整備され、開拓地が造成された。オアシスプロジェクトで歴史文献の解読を担当する井上充幸氏によれば、すでに三世紀の『後漢書』において戸数一五六〇、人口四七三三と記録されている。数字そのものの信憑性は問われるものの、巨大な開

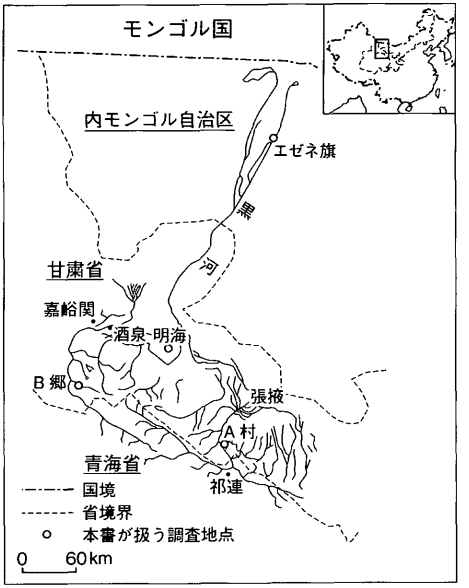

図 1-1　黒河流域の地図

©NAKAMURA Tomoko

発がおこなわれていたことは確かであろう。

開発を担ったのは屯田兵であった。彼らは、農耕開発に従事する一方で、北方から侵入する騎馬遊牧民を防ぐ任務もおびていた。夜陰に乗じて進入する騎馬軍のルートを掌握するために、足跡がつきやすいように砂をならしておくといった業務も担当した（籾山　一九九九）。

家畜という軍事兵器を群れとして大量に維持し、圧倒的に軍事優位にある騎馬遊牧民にとって、通商交渉とは実力行使にほかならず、一方、これを防ぐ側からみれば略奪にほかならなかったであろう。ただし、小さなグループでも交渉できるような場所すなわち襲撃に値する場所は限られており、黒河の下流域はまさに望ましいターゲットであったと考えられる。

時代が下って、一一世紀に西夏がこの地域を支配するようになり、のちに元の支配下に入る。この頃の都城は「カラホト」すなわちモンゴル語で「黒い町」と呼ばれる遺跡として現在、観光資源となっている。

オアシスプロジェクトで考古学的調査を担当する白石典之さんによれば、その区割りの寸法からみて、漢代に建設された城址が再利用されている。巨大な開発地域は継続的に利用されてきたのであった。

ところが、かつての居延沢は一四世紀後半までには水量が大幅に減少して三分され、この都城は一五世紀後半に放棄されてしまう。町の衰退をもたらした原因のひとつは水の枯渇にあると考えられており、その枯渇の原因を解明することがオアシスプロジェクトの課題である。原因はともかく、以降、川の本流は西へと移動した。現在、黒河は、かつての弱水よりも約三〇キロメートル西を流れている。この河川が存在することによって、年間降水量がわずか五〇ミリメートルにも満たない極度の乾燥地域であるにもかかわらず、ポプラ（ヤナギ科落葉高木、中国語で胡楊［フーヤン］、モンゴル語でトーライ、学名は *Populus euphratica*）やトネリコ（グミ科の落葉高木、中国語で沙棗、モンゴル語でジグド、学名は *Elaeagnus angustifolia*）などが河川沿いに繁茂し、緑の回廊が形成されていた。

この地に大きな変化が訪れるのは一八世紀である。一七〇四年、オイラート・モンゴル系のトルゴート部族が清朝から許可を得てこの地に移住し、遊牧生活を開始する。彼らはそもそも一六三〇年にカスピ海の西側へ移動して行った人びとであり、ギリシャ正教の強制的普及を嫌い、ボルガ河を渡って東方へ帰還してきた、といわれている。『額済納旗志』などの編纂書に採録されている伝承によれば、河川沿いの森林地帯に火を入れて草原をつくったという。緑の回廊にモンゴル系遊牧民が入植したのである。

黒河の流れは、東から西へと大きく振れて、その下流域は農耕開拓地から遊牧開拓地へと変容したけれ

ども、二〇世紀においても、この地域の特徴は基本的に変わっているわけではない。一九三〇年代に当地には日本の特務機関が設置され、一九五八年には解放軍が住民を移住させて駐屯し、六〇年代に本格的な軍事基地が建設されて今日にいたっている。現代においてもなお国境付近の軍事的要所なのである。こうした軍事的な意義が変わらない一方で、二〇世紀後半の半世紀において最も大きく変容したのは、水資源の配分状況であろう。

一九五七年に上流に鶯落峡ダム、中流に正義峡水門が建設され、農耕開発が広域的に積極的に進められ、「大躍進」と呼ばれる時代を迎える。黒河の上流域では、森林がおおいに伐採され、チベット高原などの地域から大量の移民が受け入れられた。中流域でも大量の移民が受け入れられ、農耕地が拡大した。下流域でも都市の建設、遊牧民の定住化、漢族の移入、農耕地の開拓などが同時に進められた。

上流、中流、下流のいずれの地域においても、開墾が進み、人口が飛躍的に増加したが、とりわけ巨大な人口集住区域に成長したのは中流域である（図1-2）。たとえば、張掖は一九四九年に人口二二万人であったが、一九五六年には三〇万人をひとたび越え、一九九〇年現在では四三万人におよんでいる。人口扶養力の最も大きい中流域のために、一九七〇年には中流域西部に水庫も建設され、黒河とは別にもうひとつの源流であった北大河の、エゼネ旗への流れは絶たれた。

このように二〇世紀後半の五〇年において、中流域の発達は水資源の需要を増大させ、その結果、下流域の水資源の枯渇を招いてきたのである。黒河の下流にあった二つの湖のうち、東側に位置していたソゴ

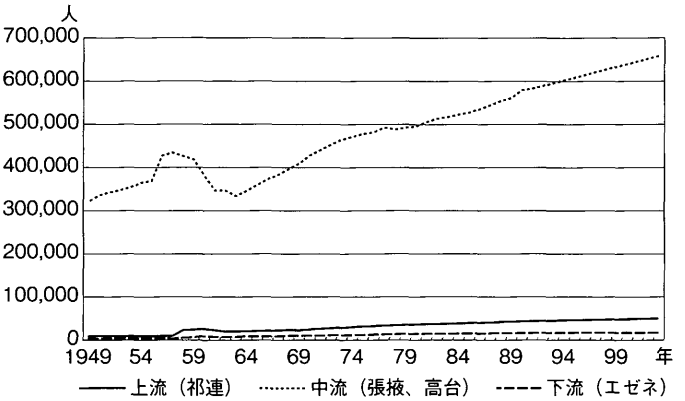

図 1-2　黒河流域における人口の推移

©NAKAMURA Tomoko

表 1-1　ソゴノール湖の面積の推移

年代	1950	1960	1970	1980
面積（km^2）	302	35.5	30	23.6

（出典）Wang and Cheng 2000：787 より中村知子作成。

ノール湖は一九九二年に全面的に枯渇してほぼ消失した（表1―1）。

一九七九年に黒河下流域が内モンゴル自治区に編入されると、中流域である甘粛省とは、省を超えた水資源の配分が必要になり、問題が複雑化した。ようやく一九九二年に国家水利部は特別委員会を設置し、水量配分に関する法案を策定し、下流域への放流量や放流時期などをそのつど協議で定めるようにした。現在、張掖は節水型農業を推進するモデル地区となっており、政策として下流域への配慮はいかにも重視されている。

「節水型社会建設」の標語にも示されているように、中国における今日の開発は、自然資源の有効な利用や生態環境の保全を謳っている。それをさらに踏み込んで、生態環境の保全を積極的に実施するための政策として「生態移民」が二〇〇一年に登場する。

黒河の上流域では「水源涵養」すなわち保水のために森林が必要であるから、森林を破壊するとされるヤギなどを追い出すために牧畜民の移住が政策課題となる。中流域では、そうした移住者を受け入れるための移民村が建設され、多大な投資がさらに集中する。「節水灌漑」という開発である。下流域では「生態回復」すなわち地下水位の低下によって立ち枯れしはじめた胡楊林を守るために、河川沿いの住民の退去が必要とされた。このようにして、黒河流域の上流から下流まで、生態環境を保全するために人を移住させるという政策が実施されていくようになる。

黒河下流域における「生態移民」前夜

黒河流域のなかでも、下流域ではおおいに矛盾をはらむものとして「生態移民」の政策が始まった、といわざるをえない。なぜなら、河川沿いの胡楊が枯れ、また湖が消失して、その結果、巻き上がる砂塵が北京を襲う原因は明らかに、当該地域の住民の活動よりもむしろ、河川に水が流れてこなくなったことそのものにあると思われるからである。にもかかわらず、胡楊林を守るために、当該地域の住民およそ一五〇〇人（五一四戸と計上されている）を二〇〇一年から三年間のうちに移住させるというノルマが課された。現地の行政担当者の話によれば、移住先は、旗中心地郊外に建築されている移民村、農耕開拓地に飼料基地を建設してその周辺、およびラクダ飼養民については遠隔地の三種類が想定されている。

二〇〇一年八～九月の予備調査当時は、まさに人びとがこの政策を「強制移住時代の再来」と捉えていた時期であった。彼らの多くが、軍事基地の建設のために一九五八年、南のバヤンボグド郡からの強制的移住を経験しており、その記憶が社会全体に蘇っていた。二〇〇二年六月の調査当時は、「生態移民」を実施する対象者がもはや選定されていなければならない時期であり、その大半は移住したくないという人びとであった。そもそも黒河下流域において、人びとはどのように工夫して自然を利用し、にもかかわらずその利用方法を放棄しなければならないのか、いくつかの事例を紹介しよう（図1-3）。

■自然環境の特徴

エゼネ旗の年間降水量はわずかに四〇ミリメートル程度にすぎない（図1-4）。過去五〇年間に漸減傾向が見られるものの、激減しているわけではなく、過去においても乾燥の厳しいところではあった。しかしながら、ここに緑の繁茂する地域が形成されていたのは、祁連山に発する黒河が十分な水を供給していたからである。

黒河は、甘粛省からエゼネ旗に入ったあたりで、二つの主たる河川に別れ、それぞれソゴノール湖（現地ではソブノールと呼ばれている）とガションノール湖に注ぐ。東がエゼネ川であり、西がムレン川である。ムレンとはモンゴル語で「大河」を意味することばで、実際のところムレン川は、複数の支流に別れたり合流したりしながら、砂漠のなかの湖にいたっていた。東のエゼネ川のほうには、ナリン川すなわち「細い川」と呼ばれる川が並行して流れており、同じく砂漠のなかの湖にいたっていた。このような複数の支流によって全体として三角州が形成されてきた。

西から順に、ムレン川、ナリン川、エゼネ川はいずれも南南西から北北東にかけてほぼ同じ方向に流れている。人びとは方位を確定するのに、この河川を利用しており、左岸を北、右岸を南とみなしている。すなわち、西北西を背にして東南東を向いたうえで、前と南、後と北を一致させる方位感覚である。

これは、南東を前および南と見て、北西を後ろおよび北と見るモンゴルの一般的な民俗方位と比較する

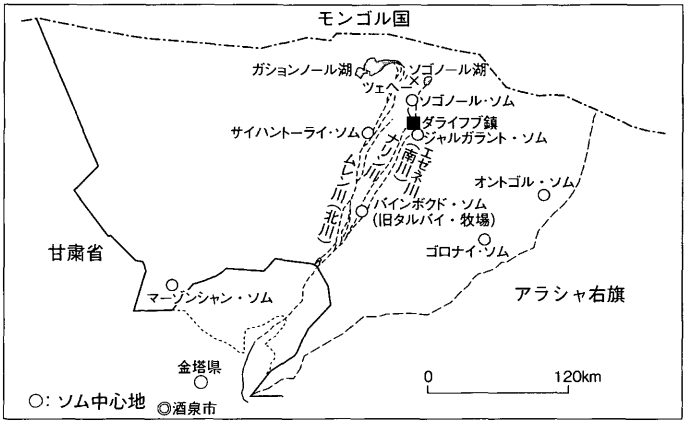

図 1-3　エゼネ旗の地図

©KODAMA Kanako

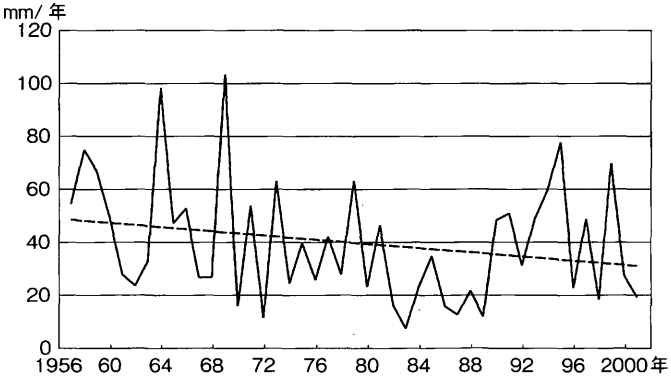

図 1-4　エゼネ旗の年間降水量

©NAKAMURA Tomoko

（注）エゼネ旗気象局資料より作成。

と、ややずれており、東を南と見立てて、西を北と見立てる、モンゴル系トルゴート族に特徴的な民俗方位に近い。この民俗方位には、はるかな西方から帰還してきたトルゴートたちの身体感覚が反映されているのかもしれない。実利的な側面から判断しても、冬の季節風がもっぱら西ないし西北西の方向から吹きつけるため、これを背にして天幕を立てることは望ましいといえよう。

■自然環境の利用

かつて、河川の沿岸にはポプラ（胡楊）の林が形成され、水量の多いムレン川ではトネリコの林も加わり、旗の中心地あたりには湖沼がいくつもあって葦類（イネ科多年生草本、中国語で芦葦、モンゴル語でホルス、学名は*Phragmites arestralis*）が繁茂していた。旗中心地の固有の地名であるダライフブとは「海の淵」という意味である。たとえば、一九三〇年にダライフブの町の少し上流にあったムフル湖あたりで生まれた女性は一九五〇年代の風景を次のように語る。

「この町のまわりにはいくつもの湖があった。そこには雁や鴨などの渡り鳥がやってきていた。白鳥は塩湖に飛来するので、このあたりには少なかった。水位の変化によって魚が死にかけることもある。そんなとき、人は魚を手ですくって水の多い場所へ戻してやっていた。川の水は途切れることがなかった。冬に凍り、春に融けて増水し、徐々に水は少なくなるが、六月に雨が降り、夏になるとま

た増える。……水辺に行くと二枚貝や巻貝がたくさんあり、それらを拾ってよく遊んだ。水辺にはラクダが見えなくなるほどの背の高い葦が生えていた」

このように、当該地域の自然環境は、礫砂漠のなかを流れる河川によって特徴づけられてきた。そのため、人びとは川を意味する「ゴル」という名称で、川のみならず沿岸の自然環境全体を表現する。そして、礫砂漠は「ゴビ」と呼ぶ。また、ゴビのなかには一部「クル」と呼ばれるところがある。そこは旧居延沢に注いでいた河川跡にあたり、砂漠のなかに葦類が生えるところで、水位が高い。また、「ゴロナイ」という固有地名をもつ場所も、水位が高いらしく、ときおり流れが見られるという。

夏にはゴビ地域に出て風を受けて涼しく過ごし、冬にはゴル地域に入って風を避けて暖かく暮らす、という季節移動が一般的に確認される。この「夏ゴビ+冬ゴル」というパターンは、人民公社時代（一九五八～一九八三年）になると、よりいっそう強化された。なぜなら、河岸部では積極的に農業開発がおこなわれ、収穫後まで牧畜業が締め出されたからである。

人民公社が成立する以前、ラクダやウマなどの大型家畜を有する富裕な人びとは、長距離を移動することができたため、冬季は「クル」や「ゴロナイ」などのより遠隔地まで赴いて越冬していた。すなわち、先述したパターンとは逆に、夏に川沿いに戻るというパターンを採用する場合もあった。人民公社時代になると、ラクダ群を専門に放牧する担当者などがこの移動パターンを踏襲した。

いずれにせよ、季節的に川に近づいたり、離れたりする移動パターンであり、空間認識のための軸として川筋が大きな意味をもっていることと彼らの行動とは整合してきたのである。

人民公社が解体すると、当地では一九八三年前後に家畜と牧地が同時に配分され、一気に定住化が進んだ。人びとは各家庭に配分されたラクダの管理に困り、これを売却処分して、移動力そのものを喪失した。また、自然草地が劣化したために、これに代えてゴル（河岸部）で飼料作物を栽培しはじめ、年間をとおしてゴルを離れることができなくなった。二〇〇二年現在での移動距離は、数百メートルからせいぜい一〇キロメートル程度であり、一般的には一～三キロメートルにとどまっている。固定的家屋に居住して狭い範囲内で放牧のための移動をおこなうようになっている。

移動距離が小さければ、概して気象の変動に対応するのは難しくなる。そこで、移動力のある人は、オトルと呼ばれてきた派遣方式を採用する。畜群を連れて管理者だけが固定住居を離れて遠くの放牧地へ赴くというスタイルである。とりわけ、旱魃傾向にあるときには、モンゴル国との国境付近にあるホンゴル山などに出向いて貴重な自然環境にアクセスしている。

■移住の勧め

ムレン川の上流にて。北川（ムレン川のこと）は、もともと南川（エゼネ川のこと）よりも水量が豊富であり、川に沿って、グミの実をつけるトネリコがたくさん茂っていた。しかし、一九五二年、下流にあったサイ

ハントーライの町から、南川のダライフブへと旗中心地を移した。それ以来、上流からの水量は優先的に南川へ流されるようになった。したがって、南川沿いに見られるトネリコは二〇世紀後半に植林したものである。

ムレン川の上流に住むAさん宅は真新しい。土地を配分してもらったとき、川のそばの冬営地と、少し高台になっているところに夏営地があった。両者のあいだは二キロメートル弱でもともと近い。冬営地には一一月から四月ぐらいまで住んでいた。しかし、胡楊を守るために柵が設けられて、川のそばは利用できなくなった。そこで、もとの夏営地に定住することにした。新居の建築費のうち半分は国から補助してもらった。なんとか家は確保したものの、牧畜についてはまだわからない。とりあえず、草（飼料作物）を植えようかと考えている、という。

この事例は、配分されている土地のなかに禁牧区が生じたため、その地区を放棄する代わりに資金を得て定住化を果たしており、まったく別の土地へ移住させられているわけではない。このように、上流は比較的水量に恵まれており、「生態移民」は必須の処方箋ではない。ただし、ゴルとゴビを季節的に使い分ける従来型の環境利用は叶わなくなるだろう。

ムレン川の下流にて。ガションノール湖に注ぐムレン川の最下流部にはバヤンタルという行政区が設けられている。「豊かな平原」という意味であり、人民公社時代は馬群の放牧地として利用されていた。

一九六〇年代までは、緑色の平原で、タマリスクは存在せず、五キロメートルに一軒くらいの間隔で家が点在していた。冬は窪地に入り、夏は草が芽吹くのを見計らって「白い場所」（開かれた空間の意味）に出た。七〇年代になるとムレン川の流量が減少し、井戸を掘るようになった。

この行政区域内に住むBさん宅は、電動ポンプが四六時中水を汲み上げている集落の、一角にある。周辺には空き家がめだつ。もはや三軒しか残っていない、という。隣の家はここから一五〇キロメートルほどの馬髭山（マーゾンシャン）に移住していった。馬髭山は移住先候補のひとつになっている。Bさんに提示されている移動先は、ムレン川を遡ったところにある中心地サイハントーライか、その郊外の農場「紅星」かのいずれかである。しかし、彼女はどちらも選択したくはないので、現住地にとどまり、躊躇している。なぜなら、今後、水はソゴノール湖に入れられてもガションノール湖に入れられることはないからだ、という。

この事例は、政治的決断によって水流を止められる地域に含まれている。すなわち、エゼネ旗において最も高次の町であるダライフブを守るために、今後は、東のエゼネ川とソゴノール湖に比べれば、西のムレン川とガションノール湖は保護されない。それゆえの移住勧告である。しかし、提示されている移住先はいずれも、より上流部であるとはいえ、しょせん同じ川筋であり、そのことが移住を承諾できない理由になっている。いまのところ、地下水に依存して住むことがかろうじて残された生存戦略となっている。

エゼネ川の下流にて。エゼネ川の下流にはツェヘー・ソムという行政区がある。モンゴル国との国境貿易が認められている地区である。二〇〇二年の場合は六月四日から二週間、国境が開かれた。参集する人びとのために宿泊施設や食堂が必要となるので、周辺住民の多くがこの時期、国境付近に北上して、サービス業に従事する。この南には、俗に「老東廟（ラオトンミャオ）」とよばれる寺院跡があり、そこに飛行場の痕跡が見受けられる。日本の特務機関の跡地である。さらに、南にソゴノール・ソムという今は亡き湖の名前を付した小さな中心地がある。人民公社時代の中心地跡である。このあたりもかつては、カッコウ、オオミミズク、フクロウなどがいた。現在は、オオカミがモンゴル国から南下してやってくる。中国ではオオカミの捕獲が禁止されており、いわばオオカミの天国になっていることを、まるでオオカミ自身がよく知っているかのようである。

ツェヘーの行政区域内に住むCさん宅は、エゼネ川やナリン川がたくさんの支流に別れて流れる下流にあり、ひとつの小川からほど遠くないところにある。元教師で、三〇年来ここに住んでいる。家畜はヤギを中心に二〇〇頭ばかり飼っているが、今年の春は一〇頭しか子ヤギが生まれなかった。二〇頭のラクダはゴビに放ってあり、水が必要になれば自分たちで帰宅してくる、という。川の周辺一帯には農地が広がっており、彼女も少しばかり飼料作物を作っている。周辺にはあまり胡楊が見あたらず、視界をさえぎっているのはタマリスク（ギョリュウ科落葉低木、中国語で紅柳、モンゴル語でソハイ、学名は*Tamarix*属）である。行政担当者から、新居を用意するからソゴノール・ソムの中心地に移住するように言われている。しかし、

彼女は移住したくはない、という。

この事例は、そもそもなぜ移住させる必要があるかという意義そのものが問われる事例になっている。もし、移動してしまうと、今のような生計維持はできなくなる。たとえ舎飼いの施設が完成したとしても、二〇〇頭を畜舎のなかで飼えないというのが大半の人びとの意見である。牧畜に代わる仕事が用意されるわけでもない。したがって、当人が健康で現在の生活を続けられるかぎり、自分の意志で移住することはないだろうと思われる。

おわりに

この「オアシスプロジェクト」研究には、多くの研究者たちが参加して黒河流域の各地に赴いている。そして、同じ政策のもとに翻弄されながら生きる人びとの姿がとらえられてきた。そこで、本格的に事例を比較検討するための国際シンポジウムを北京で実施し（阿拉騰・大禹　二〇〇四）、さらに総合的に中国における環境政策の現在をとらえるための本書が編まれた。

ただし、本稿で紹介した三事例はいずれも生態移民政策の実施された実例ではない。まさに実施されようとする「前夜」の段階での状況を示している。

「生態移民」の実施状況について、同時代を生きる人間として観察し、分析し、その実証的研究に基づ

いて提言してゆくことは、私たち研究者が地球環境問題に対して、そもそもどのように貢献しうるかという意味でも「前夜」に相当するだろう、と思われる。

◉参考文献

阿拉騰・大禹　二〇〇四「生態移民国際研討会在京挙行」『広西民族学院学報（哲学社会科学版）』第五期：一四九。
堇　正鈞　一九五二『居延海（額済納旗）』中華書局出版。
籾山　明　一九九九『漢帝国と辺境社会――長城の風景』中公新書。
色　音　二〇〇三『居延故地――黒河流域的人文生態』四川人民出版社。
額済納旗誌編輯委員会　一九九八『額済納旗誌』方志出版社。
スウェン・ヘディン　一九八八『ゴビ砂漠横断――スウェン・ヘディン探検記』羽鳥重雄訳、白水社。
中国社会科学院民族学人類学研究所・日本総合地球環境学研究所　二〇〇四『国際シンポジウム「生態移民――実践と経験」』（抄録）、七月三〇日～三一日、於北京・中国社会科学院。